〔B 年〕聖霊降臨日(2022 年 6 月 5 日)

【旧約聖書日課】ヨシュア記　1章1～9節

1主の僕モーセの死後、主はモーセの従者、ヌ
ンの子ヨシュアに言われた。2「わたしの僕モー
セは死んだ。今、あなたはこの民すべてと共に
立ってヨルダン川を渡り、わたしがイスラエル
の人々に与えようとしている土地に行きなさい。
3モーセに告げたとおり、わたしはあなたたちの
足の裏が踏む所をすべてあなたたちに与える。
4荒れ野からレバノン山を越え、あの大河ユーフ
ラテスまで、ヘト人の全地を含み、太陽の沈む
大海に至るまでが、あなたたちの領土となる。
5一生の間、あなたの行く手に立ちはだかる者は
ないであろう。わたしはモーセと共にいたよう
に、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、
見捨てることもない。

6強く、雄々しくあれ。あなたは、わたしが先
祖たちに与えると誓った土地を、この民に継が
せる者である。7ただ、強く、大いに雄々しくあ
って、わたしの僕モーセが命じた律法をすべて
忠実に守り、右にも左にもそれてはならない。
そうすれば、あなたはどこに行っても成功する。
8この律法の書をあなたの口から離すことなく、
昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることを
すべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなた
は、その行く先々で栄え、成功する。9わたしは、
強く雄々しくあれと命じたではないか。うろた
えてはならない。おののいてはならない。あな
たがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」

【使徒書日課】使徒言行録　2章1～11節

1五旬祭の日が来て、一同が一つになって集ま
っていると、2突然、激しい風が吹いて来るよう
な音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に
響いた。3そして、炎のような舌が分かれ分かれ
に現れ、一人一人の上にとどまった。4すると、
一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、
ほかの国々の言葉で話しだした。

5さて、エルサレムには天下のあらゆる国から
帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、
6この物音に大勢の人が集まって来た。そして、
だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されてい
るのを聞いて、あっけにとられてしまった。7
人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこ
の人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。8どう
してわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の
言葉を聞くのだろうか。9わたしたちの中には、
パルティア、メディア、エラムからの者がおり、
また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポ
ントス、アジア、10フリギア、パンフィリア、エ
ジプト、キレネに接するリビア地方などに住む
者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、
11ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もお
り、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、
彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っ
ているのを聞こうとは。」

【福音書日課】マルコによる福音書　3章20～30節

20イエスが家に帰られると、群衆がまた集ま
って来て、一同は食事をする暇もないほどであ
った。21身内の人たちはイエスのことを聞いて
取り押さえに来た。「あの男は気が変になって
いる」と言われていたからである。22エルサレム
から下って来た律法学者たちも、「あの男はベ
ルゼブルに取りつかれている」と言い、また、
「悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」と言
っていた。23そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、
たとえを用いて語られた。「どうして、サタン
がサタンを追い出せよう。24国が内輪で争えば、
その国は成り立たない。25家が内輪で争えば、そ
の家は成り立たない。26同じように、サタンが内
輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。
27また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、
その人の家に押し入って、家財道具を奪い取る
ことはできない。まず縛ってから、その家を略
奪するものだ。28はっきり言っておく。人の子ら
が犯す罪やどんな冒涜の言葉も、すべて赦され
る。29しかし、聖霊を冒涜する者は永遠に赦され
ず、永遠に罪の責めを負う。」30イエスがこう言
われたのは、「彼は汚れた霊に取りつかれてい
る」と人々が言っていたからである。

「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

ヨシュア記　1章1～9節

1主の僕モーセの死後、主はモーセの従者であったヌンの子ヨシュアに言われた。2「私の僕モーセは死んだ。さあ今、あなたとこの民は皆立ち上がり、このヨルダン川を渡りなさい。その先には、私がこの民、イスラエルの人々に与える地がある。3私はモーセに告げたとおり、あなたがたの足の裏が踏む所をことごとくあなたがたに与える。4この荒れ野から、あのレバノン山、大河ユーフラテスに至るまで、さらにヘト人のすべての地と、太陽の沈むあの大海に至るまでが、あなたがたの領土となる。5あなたの命の続くかぎり、誰一人あなたの前に立ちはだかる者はいない。私がモーセと共にいたように、私はあなたと共にいる。あなたを見放すことはなく、あなたを見捨てることもない。6強く、雄々しくあれ。私がこの民の先祖に誓い、今この民に与える地を、彼らに受け継がせるのはあなただからだ。7あなたはただ、大いに強く、雄々しくありなさい。私の僕モーセがあなたに命じた律法をすべて守り行い、そこから右にも左にもそれてはならない。そうすれば、あなたはどこに行っても成功を収める。8この律法の書を口から離さず、昼も夜もこれを唱え、書かれているすべてのことを守り行いなさい。そうすれば、あなたは、行く先々で栄え、成功を収める。9強く、雄々しくあれと、私はあなたに命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行っても、あなたの神、主があなたと共にいるからだ。」

使徒言行録　2章1～11節

1五旬祭の日が来て、皆が同じ場所に集まっていると、2突然、激しい風が吹いて来るような音が天から起こり、彼らが座っていた家中に響いた。3そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他国の言葉で話しだした。

5さて、エルサレムには天下のあらゆる国出身の信仰のあつい人々〔*異本→ユダヤ人*〕が住んでいたが、6この物音に大勢の人が集まって来た。そして、誰もが、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられた。7人々は驚き怪しんで言った。「見ろ、話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。8どうして、それぞれが生まれ故郷の言葉を聞くのだろうか。9私たちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、10フリギア、パンフィリア、エジプト、リビアのキレネ側の地方に住む者もいる。また、滞在中のローマ人、11ユダヤ人や改宗者、クレタ人やアラビア人もいるのに、彼らが私たちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

マルコによる福音書　3章20～30節

20イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。21身内の人たちはイエスのことを聞いて、取り押さえに来た。「気が変になっている」と思った〔*別訳→人々が言っていた*〕からである。22エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」と言っていた。23そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえを用いて語られた。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。24国が内輪で争えば、その国は立ち行かない。25また、家が内輪で争えば、その家は立ち行かない。26もしサタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。27また、まず強い人を縛り上げなければ、誰も、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。28よく言っておく。人の子らが犯す罪やどんな冒涜の言葉も、すべて赦される。29しかし、聖霊を冒涜する者は永遠に赦されず、永遠の罪に定められる。」30イエスがこう言われたのは、「彼は汚れた霊に取りつかれている」と人々が言っていたからである。

黙想のためのノート

次主日教会暦と聖書日課について

・6 月 5 日「聖霊降臨日」の日課主題は「聖霊の賜物」。「聖霊降臨日」は、「使徒言行録」2 章に伝えられる「五旬祭（ペンテーコステー）」の折に弟子たちの集団に起こった出来事を記念する祝祭。「五旬祭」は、ユダヤの祭り「七週祭（シャブオット）」のギリシア語呼称で、キリスト教会ではそのままの呼称を用いてきた。「七週祭」は、「過越祭」の途中で祝われる「初穂の祭り」から七週間後（50 日目）に祝われた小麦収穫の祝いだが、モーセがシナイ山で神から律法を授与されたことを記念する「律法授与記念日」としても位置付けられてきた。

・「聖霊降臨日」の主日聖書日課は、「使徒言行録」2 章の朗読を中心に設定されている。旧約聖書日課は、「ヨシュア記」から、本書冒頭のヨシュアがモーセの後継者として神からの使命を告げられたことを描く箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、「ベルゼブル論争」の箇所。

旧約日課（ヨシュア 1 章より）

・「ヨシュア記」は、ユダヤ正典「前の預言者」の第一に置かれ、続く「士師記」「サムエル記」「列王記」と共にイスラエルのカナン定住時代を物語る「イスラエル正史物語」のうち、モーセの後継者ヨシュアによってイスラエルの民がカナンに侵入・定住した時代を構成する。ヨシュアの位置づけは、もっぱらモーセの後継者としての役割であるが、モーセ物語の中で「イスラエル」を定義づけるものとされた「シナイ契約」（出エジプト記 19~24 章）をカナンの地に結び付けた立役者であるという意味では、後の王国時代全般を通して前提とされる「大イスラエル主義」の歴史的原点を為した人物として、モーセ以上に存在感を示している。すなわち、モーセの「シナイ契約」を歴史的な出来事として象徴する「神の箱（掟の箱）」は、ヨシュアによって、後に北王国イスラエルの領域となる「シロ」の地に建てられた「幕屋（≒神殿）」に安置されるが、王国時代を迎えた時期にダビデによって、まず南王国ユダの地にもたらされ、ダビデが北王国イスラエルとの連合王国の王となるに際して、エルサレムにもたらされる。このようにして、エルサレムは、モーセの「シナイ契約」に基づいて、南北両王国の領域を包括する「イスラエル」全体の共通の基盤を象徴的に担う地として位置づけられることになった。

・ヨシュアは、「モーセ物語」中で「エフライム族」出身とされている（民数記 13:8 および同 16 節）。「エフライム族」は、父祖ヤコブの 12 人の息子の内「ヨセフ」を父とする二人の子「マナセとエフライム」の後者を祖とする部族で、「マナセ族」と共に後の北王国の中核を形成した。つまり、「ヨシュア伝承」は「エフライム族」と結びついている。「ヨシュア」の名は、ギリシア語では「イェス―ス」と表記され、後代のユダヤ人に広く用いられる名となった。「イエス」の名は「ヨシュア」である。

使徒書日課（使徒 2 章より）

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」と共に「ルカ文書」と呼ばれ、同じ著者により著された上下二巻本の下巻を構成している。上巻「ルカ福音書」が「主イエスの生涯の物語」として編纂されているのに対して、下巻「使徒言行録」は、主イエスの教えと働きを継承する弟子たちの集団＝教会が、そのしるしとして「聖霊」を授与し、世界中にその教えと働きを伝播していく「教会の物語」として編纂されている。

・日課箇所は、主イエスの約束された「聖霊」が集まっていた弟子たち各人に降臨し、彼らが「神の偉大な業」を語る宣教をはじめた出来事を物語る場面の冒頭で、本書全体の展開を基礎づける事柄が描かれる。

・「聖霊」授与に伴って個々の者に起こったこととして描かれるのが、「舌」＝「言葉」に関する事柄である。3 節の「舌」と 4 節および 11 節の「言葉」は、いずれも「グロッサー」という語で、通常は「舌」または「言葉」と訳されるが、「新約文書」の翻訳では一部で「異言（グロッソラリア）」と訳されてきたことから、解釈に混乱が生じてきた。「異言（グロッソラリア）」は、一般に「理解不能な言語的表出」を指す用語で、呪術や宗教的営為、また精神障害などに伴う現象として定義づけられてきた一方で、通俗的には、日課箇所で描かれている現象をもとにして「他国語を（習わずに）語ること」としても理解されてきた。どちらにしても、元来の「グロッサー」の語そのものが意味する事柄からは逸脱がみられ、そのような用例があるとしても、多くの場合は元来の意味（単に「舌」または「言葉」）で解釈されるのが適当と考えられる。「パウロ書簡集」には、「預言（プロフェーテイア）」と対比的に「異言（グロッサー）」が取り上げられる例があるが（コリントの信徒への手紙一 12～14 章など）、他の「グロッサー」の用例はすべて言葉を語る器官としての「舌」を意味するものとして用いられており、パウロが特殊な言語現象である「異言」を指す語として「グロッサー」を用いた例とは考え難い。おそらく、「弁舌」の能力を示すために「グロッサー」を用いたのだろう。

・4 節「ほかの国々の言葉で（ヘテライス・グロッサイス）」の直訳は「異なる舌で」で、必ずしも外国語を指すわけではない。6 節および 8 節の「（自分の）故郷の言葉（イディア・ディアレクトス）」の直訳は「固有の言語（発話）」（「ディアレクトス」の原義は「対話・会話」）で、これも厳密にさまざまな外国語を指して用いられているとは必ずしも言えない。ここで描かれる現象が、「聖霊授与によって使徒たちが（習わぬ）外国語で語り始めた」とされるのは、9~11 節でさまざまな地方出身者のリストが挙げられることに基づいた推認による。実際には、当時のガリラヤ出身者はアラム語を話し、律法学者らはヘブライ語で教えていたと考えられ、それに対して、使徒たちがギリシア語など多様な人々と対話可能な言語によって宣教を始めたことを示しているのだろう。

福音書日課（マルコ３章より）

・日課箇所は、「ベルゼブル論争」として知られる逸話を伝える箇所。この逸話は、共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）が共通して伝えているが、前後の文脈の構成などに差があり、各福音書で異なる位置づけを与えていると考えられる。「マルコ福音書」では、マタイやマルコと比べて、この逸話そのものは簡潔な叙述である一方、前後に主イエスの家族が登場し、それを受けて「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」という問題提起に基づいて「主イエスのもとで始められる新しい共同体」の概念が提示される、という枠の中に「ベルゼブル論争」の逸話が置かれている。

・「ベルゼブル論争」そのものに目を向ければ、共観福音書で共通して取り上げられている事柄の鍵となっているのは、「悪霊（ダイモニオン）」の問題であり、端的には主イエスと「悪霊」との関係についての問いである。「悪霊」は、この逸話に続く箇所で取り上げられる「汚れた霊（プネウマ・アカタァルトス）」と事実上同一視されていると見ることができるが、元来は異なる概念である。「汚れた霊」は、元来、「聖霊（プネウマ・ハギオス）」の対義語であり、マタイとマルコでは、実際にそのような扱いで出てくる。「悪霊（ダイモニオン）」は、神的実体や超自然的な諸力を示す用語であり、「風（プネー）」と同根語である「霊（プネウマ）」に比べるとより実体性や具体性を伴う事柄を指し示している。それに対して、「霊」は、実体間を移動するようにして他の者に影響を及ぼすような現象を指し示す、概念性の高い用語である。

・28~29 節で「赦し」の問題が取り上げられ、ただ「聖霊を冒涜する」ことに対してのみ厳しく「赦し」の対象から外されていることは、この箇所の中でも解釈が困難な部分とされてきた。「マルコ福音書」では、「聖霊」が取り上げられる例は少ないが（1:8、3:29、12:36、13:11）、その用例によって明確なのは、「聖霊」が「洗礼」に伴って人に与えられるものであり（1:8）、旧約の信仰者（ダビデ）にも与えられ（12:36）、弟子たちにも与えられて（13:11）、語るべき言葉を与えられる原動力として取り上げられている、ということである。これらの用法から見て、「聖霊を冒涜する」とは、「神の言葉」または「神の言葉を語る者」に対する侮辱や軽視など冒涜行為を意味していると推認される。

来週の誕生日（6 月 5 日～11 日）

主日礼拝の讃美歌から

・21-343 **番「聖霊よ降りて」**（＝Ⅰ499 番）は、19 世紀米国メソジスト教会の牧師ストークスの作詞。曲は、日本のメソジスト派讃美歌集『譜附基督教聖歌集』（1884 年）の編纂に際して依頼して作曲された。

・21-417 **番「さあ、共に生きよう」**は、ドイツで毎年行われている全国信徒大会 1983 年大会のために編纂された讃美歌集から採用された讃美歌。

・21-345 **番「聖霊の力にあふれ」**は、20 世紀英国教会司祭ピーシーの作詞に、同じく英国教会司祭で王立音楽学校チャプレンのテイラーの曲が付されている。ピーシーの創作活動は最晩年。

21-343「聖霊よ、降りて」＝I499

Hover o'er me, Holy Spirit

1. Hover o'er me, Holy Spirit, / Bathe my trembling heart and brow; / Fill me with Thy hallowed presence, / Come, oh, come and fill me now.

〔Refrain〕:Fill me now, fill me now, / Holy Spirit, fill me now; / Fill me with Thy hallowed presence, / Come, oh, come, and fill me now.

2. Thou canst fill me, gracious Spirit, / Though I cannot tell Thee how; / But I need Thee, greatly need Thee, / Come, oh, come and fill me now. *[Refrain]*
3. I am weakness, full of weakness, / At Thy sacred feet I bow; / Blest, divine, eternal Spirit, / Fill with pow'r, and fill me now. *[Refrain]*
4. Cleanse and comfort, wholly save me, / Bathe, oh, bathe my heart and brow; / Thou dost sanctify and seal me, / Thou art sweetly filling now. [Refrain]

21-417「聖霊によりて」

We are One in the Spirit

1. We are one in the Spirit, we are one in the Lord. / We are one in the Spirit, we are one in the Lord. / And we pray that all unity may one day be restored, / and they'll know we are Christians by our love, by our love. / Yes, they'll know we are Christians by our love.
2. We will walk with each other, we will walk hand in hand. / We will walk with each other, we will walk hand in hand. / And together we'll spread the news that God is in our land. / and they'll know we are Christians by our love, by our love. / Yes, they'll know we are Christians by our love.
3. We will work with each other, we will work side by side. / We will work with each other, we will work side by side. / And we'll guard each man's dignity and give up all our pride. / and they'll know we are Christians by our love, by our love. / Yes, they'll know we are Christians by our love.
4. So all praise to the Father from whom all things come. / And all praise to Christ Jesus, His only Son. / And all praise for the Spirit who makes us one. / and they'll know we are Christians by our love, by our love. / Yes, they'll know we are Christians by our love.

21-345「聖霊の力にあふれ」

Filled with the Spirit's Power

1. Filled with the Spirit's power, with one accord / the infant church confessed its risen Lord. / O Holy Spirit, in the church today / again your power of fellowship display.
2. Now with the mind of Christ set us on fire, / that unity may be our great desire. / Give joy and peace, give faith to hear your call, / and readiness in each to work for all.
3. Widen our love, good Spirit, to embrace / the people of all lands and every race. / Like wind and fire, with life among us move, / till we are known as Christ's and Christians prove.